

---

# 蒼天の軌跡

空トカゲ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼天の軌跡

### 【Nコード】

N9870J

### 【作者名】

空トカゲ

### 【あらすじ】

戦乱の世の中。ある日出会った少年と少女と精霊達との物語。

## 序 1 『少年と獣』

「どわあああー!」

始まりはいつも唐突には言いが、まさにその通りだと思ふ。この絶叫が物語の始まりだった。

今日の天候は清々しいほどの快晴。

空には雲ひとつかかっておらず、カラッと晴れ渡った空にその叫びは必要以上に大きく響いた。

木の枝の上でウトウトとしていた野鳥はその騒がしさに飛び起きた。

いったい何事かと辺りを見回す間もなく、遅れて響いた地鳴りのような振動音と、少し離れたところ立ち上る砂煙。

自分に危険が及ばないことにとりあえずホッとした後、未だにやまない騒音に迷惑そうな目をしながらその場を飛び去った。

「ああああー!!」

一方、先程から叫び倒している少年は、ゴツゴツした無機質な岩場を全力疾走していた。

そのすぐ後ろからは巨大な砂煙が、彼の目掛けて迫ってくる。もっと正確に言えば、砂を巻き上げながら巨大な何ものかに追われていた。

その正体は、この近隣では砂主すなぬしと呼ばれる巨大な肉食のトカゲである。

体長は優に十メートルを越え、幅も小屋ほどの大きさがある。そして何より危険視されるのがその食欲と狂暴性。

「だぁー！食われてたまるか！」

砂主は牛すら軽く丸飲みにしてしまつのだ、捕まつたあかつきには人間などひとたまりも無いだろう。

しかしこの生物は巨体に似合わず俊敏。背後から迫られるのを目の端にとらえて、少年は更に走る速度を上げた。

「わ、わわ！ダイヤモンド、もっと静かに走れよ！」

少年の肩には妙な生き物が乗っていた。揺さぶられながらも、振り落とされぬように必死にしがみついている。

黒と青の毛並で、パツと見た感じ猫や狐のようにも見える。しかしその背中には羽が生えており、何よりさも当たり前のように人語を話している。

「うっさいクロ、そんなこと言ってる場合か！我慢しろ！」

少年も彼が喋つたことにさして驚く様子めなく、当たり前のように対応した。

「オレを落とさないように、尚且つ追い付かれないように走るんだ」

「無茶言つな。大体誰のせいでこうなつたと思つてんだ!？」

「ダイヤモンドだろ！」

「アホ、お前だろうが！お前が騒がしくしなければあのトカゲにも気づかれなかつた！」

「それよりもダイヤモンドが地図無くしさえしなければ、あんな道通らなくて済んだんだ！」

「それは関係ないだろ！」

「関係ある！」

少年の名はダイヤモンド 喋る動物はクロ。

二人、もとい一人と一匹。走るとは止めず、額を付き合わせたままギヤーギヤーと言い合うが、そうすると当然前方不注意になるわけ……

「……わー！ダイヤモンド、前、前！」

「は？」

グラリと体が傾いた。本来、先まで続いている筈の道は無くなっており、踏み出した足は宙を蹴った。

「「あ……」「」

気がついたときにはもう遅い。今日何度目になるか、叫び声を残し

て、一人と一匹は断崖の下へと落下していった。

「痛い」

頭を擦りながらダイヤモンドは水の中から脱出した。

あの高さから落ちて、たったこれだけの感想で済むのは、きっと運が良いのだろう。だが全身ズブ濡れだ

幸か不幸か、落下した先には湖が広がっていた。湖の底に頭をぶつけたし、衣服は重いが無傷なだけでもよしとしよう。

服の水気を絞っていると、クロが水の中から這い出てきた。全身の毛が寝てしまい、いつもより小さく見える。

「よう、無事かクロ」

「…全然無事じゃない」

クロはブルブルと水を払いながら不機嫌な声でそういった。どうやら濡れてしまったことで不機嫌になってしまったようだ。

「まったく、ダイヤモンドとなると毎回録な目に合わない」

「そりゃこっちの台詞だ。毎度毎度ワケわからんもの引っ張って来られるこっちのみにもなれ」

「そっちこそ、その直ぐに落とし物する癖どうにかしろよ」

再びいがみ合いそうになった一人と一匹だったが、ずぶ濡れのまま睨み合うのもバカらしくなり、同時ため息をついた。

「……それより、あんだけ濡れだけど荷物大丈夫？」

そのクロの言葉に、ダイヤモンドはハツとしたように脱ぎ捨てた上着のポケットからケースのようなものを取り出し、恐る恐る中を覗いた。

「…無事だった」

ホッと肩を下ろすダイヤモンド。クロもどこか安堵したように息をついた。

「ギリギリセーフだね」

「ああ、これで荷物ダメにしたら社長に何されるか…」

考えただけで恐ろしい、という言葉を読み込んでダイヤモンドは身震いした。それは同感、とクロが呟く。

「…まあ荷物無事でも届けられなきゃ意味ないんだけどな」

「ここ何処だろう、本当」

辺りを見回せば、先ほどの岩場とは違って変わって、木々が生い茂り緑がどこまでも続いている。同じ様な景色ばかりですますます現在位置がわからない。

「ダイヤモンドが地図無くしさえしなければ…」

「お前、くどいな」

「くどくもなるさ。何でこんな手軽に遭難しなきゃならないんだ」

「あー…悪かったって。確かに配達人が迷子なんて洒落にならないと俺も……」

突然、ピタリとダイヤモンドが口を閉ざした。クロは訝しげに首を傾げた。

「ダイヤモンド？」

「クロ、何か聞こえないか」

「え？」

……ーン、ゴーン

耳に神経を集中させれば確かに聞こえた。金属が響き渡るような音色、これは

「鐘の音……」

「行くか、クロ」

ヒョイとクロを持ち上げて自身の肩の上に乗せ、ダイヤモンドは歩き出した。その足取りはハッキリとしており、鐘の音がする方へ真っ直ぐ進んでいる。

「案外、近道だったのかもな」

「行き当たりばったりすぎるけどね」

始まりの風を運んだのは、配達人の少年と獣

N  
E  
X  
T

## 序 2 『少女』

とある建物の一室で、少女が一人、椅子に座ったままうたた寝をしてい。

コックリコックリと船を漕ぎながらも、けして倒れないのだから、何とも器用である。

一つの束ねてある金色の髪が動きに合わせて揺れていた。

「おーい、サラー！」

呼ぶ声が出て、少女は弾かれるように椅子から立ち上がった。急に意識が覚醒したことで動悸が激しく脈打つ。

一瞬、状況が掴めていないように辺りを見回して、直ぐ様「しまった！」といわんばかり表情に表情を歪めた。

「サラー、ちょっと来てくれないかー？」

呼ぶ声は階段の下から聞こえてくる。同時にガンガンと何か作業をする喧騒も響いてきた。

「は、はぁーい！今行きます！」

上擦った声で返事をして、サラは一階への階段を駆け降りた。

一階はフロア全体が工房のような造りになっている。部屋の真ん中では中年男性が一人、黙々と作業に打ち込んでいる。

「ユリーさん、お待たせしました！」

飛び込むようにサラが一階に降りてくると、男は手を休め顔を上げた。

「おお、来たか。…どうした？そんなに息切らせて」

「いえ、ちょっとボーツとしてまして」

嘘は言っていない。まさか居眠りしてましたと正直に言える訳がないので少々言葉を濁してはあるが……

彼、ユリーはサラが助手として働いている此処『魔具商工店アクエリア』の店主である。

魔具まぐとは、物質に魔法を込めて道具として加工した物のことを指す。

例えば、光の術を込めれば暗闇を照らす灯りとして、火の術を込めれば暖房器具として、それぞれ用いることができる。今日においては、日常生活から技術の最先端まで様々なところで魔具が使われており、文明の発展とは切っても切り離せない存在である。

そして魔具を作る技術を持ち、それを生業としている人々のことを  
魔技師まぎしと呼ぶ。

ユリー自身も少しは名の知れた魔技師である。国家からの要請で魔  
具を手掛けることも少なくない。

「実は、これから魔具の点検頼まれてるんだけど…。少し作業が立  
て込んでてね」

ユリーは目線だけで現在作業中の魔具を指してみせた。テーブルの  
上には大きな鉱物のような塊がこれ見よがしに置かれている。

「大きいですね。コレ何の魔具ですか？」

「町の灯台の光の源だよ。今朝方急に調子がおかしくなったら  
しい」

「へエー、始めて見た」

「日没までにどうにかコレを直さなければならぬのだが……どう  
やら、かかりつきりなってしまいそうなんだ。そこでだサラ、私の  
代わりに点検に行ってきたくないか？」

「え？…私が行ってもいいんですか!？」

ユリーの助手として働いてはいるが、サラは“まだ”魔技師ではな  
い。所謂見習いといったやつだ。

「まあ、光灯の故障だし、そこまで難しくは無いだろっからね」

「行きます。ぜひとも行かせてください！」

サラはユリーのことを尊敬している。いつか彼のような一人前の魔技師になりたいと日夜努力も怠らない。

今までユリーの補助として仕事に出向いたことはあったが、こうして単独で仕事を頼まれるのはこれが始めてだ。

ユリーの元で働き始めて2年、努力が確実に実っていることを実感できる。喜ばずにはいられない。

「おお、良いやる気だな。頼むぞ看板娘」

「ハイ！では行ってまいります！」

ピシッと背筋を伸ばして、サラは敬礼の真似事をして見せた。

此処は永世中立国エルカ、産業の町アール。

今、世界の情勢は大きく荒れていた。属に言う戦乱の世というやつだ。毎日どこかの国で戦火が上がリ、外戦・内乱見境なく争いが絶

えず勃発している。

きっかけはもう50年以上も前。日頃から対立関係にあった二つの大国が戦争を始めたことから始まった。

二国の力は拮抗しており、次第に戦いは長期化していった。二国の同盟国も次々に参戦し、更には資源をもとめ近隣の国を次々と支配下に置いていった。

こうして戦争の波紋は世界中へと広がっていった。後に第七次世界大戦といわれる戦争である。

そんな乱れた世界の中で、エルカはとても平和な国だった。

サラは孤児だった。町の入り口に捨てられていたところを今の両親に拾われた。以来、この場所で育ち、暮らしてきた。

自分の生まれも本当の親のこと知らない。しかし寂しいと思ったことは一度もない。

自分にはちゃんと家族がいるし、何にも代えがたい平和な日常がある。今でも十分に幸福なのだから。

「さて、お仕事頑張りますか！」

澁刺とした表情でサラは店をあとにした。

町の中央にある時計台からは三時を告げる鐘の音が鳴り響いていた。

選択を迫られる少女

N  
E  
X  
T

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9870j/>

---

蒼天の軌跡

2010年10月10日04時04分発行